

「古文I」の特長と使い方

●本書のねらい

このテキストは、高等学校で本格的に古文を学習するために必要な古文の基礎を、完全に身につけることができるように編集されています。

古文も昔の人が使用した日本語には違いありませんが、その入門期の学習において、外国語にとりくむのと同じような心がまえが必要だといわれています。このテキストでは、今までまったく古文になじみがない人も、無理なく古文読解力をつけることができるように、古文の「A、B、C、……」ともいえる「歴史的かなづかい」に始まる最も基礎となる事項に多くのページをさき、冒頭で述べたこのテキストのねらいが達成できるように工夫してあります。

●本書の特色

○このテキストは、「古文入門編」「読解の基礎編」「読解演習編」で構成されています。

○「古文入門編」「読解の基礎編」では、高校生必読の作品から入試、教材などでよくとりあげられる箇所を、例文や問題文としてとりあげています。

○各単元とも見開きの二ページで区切りがつくようにまとめ、学習計画がたて易くなっています。

○今後の古文の学習に役立つように、例文や問題文の「出典」が明示してあります。

●本書の構成と使い方

古文入門編

ここで、古文を読むために必要な最も基礎的な知識を修得します。歴史的かなづかい、古語と現代語の違い、古典の常識などを完全に身につけて、次の「読解の基礎編」に進んでください。

読解の基礎編

古語と古文のいろいろな表現に対する理解を深め、文語文法の要点をまとめることで、古文読解の基礎を固めます。学習した事項が、後の単元の設問で何度も繰り返し演習できるようにになっています。

読解演習編

ここまで学習した古文読解の基礎を、ジャンル別の総合問題で確認します。弱点がある場合は、「読解の基礎編」で再度学習しておくことが大切です。

〈解答・解説(別冊)〉………解答例とともに、詳しい「解説」と「口語訳」がっています。

目次

古文入門編

| | | |
|---|--------------|----|
| 1 | 歴史的かなづかい | 4 |
| 2 | 古語と現代語(1) | 6 |
| 3 | 古語と現代語(2) | 8 |
| 4 | 音便 | 10 |
| 5 | 語の省略 | 12 |
| 6 | 古典の常識(1) | 14 |
| 7 | 古典の常識(2) | 16 |
| 8 | 口語文法と文語文法の違い | 18 |

読解の基礎編

| | | |
|---|----------------------|----|
| 1 | 動作主(主語)をとらえる(1) | 20 |
| | 文語文法の要点① 用言―動詞(1) | 22 |
| 2 | 動作主(主語)をとらえる(2) | 24 |
| | 文語文法の要点② 用言―動詞(2) | 26 |
| 3 | 重要古語(1) | 28 |
| | 文語文法の要点③ 用言―動詞(3) | 30 |
| 4 | 重要古語(2) | 32 |
| | 文語文法の要点④ 用言―形容詞・形容動詞 | 34 |

読解演習編

| | | |
|----|-----------------------|----|
| 5 | いろいろな表現(1) | 36 |
| | 文語文法の要点⑤ 助動詞(1) | 38 |
| 6 | いろいろな表現(2) | 40 |
| | 文語文法の要点⑥ 助動詞(2) | 42 |
| 7 | いろいろな表現(3) | 44 |
| | 文語文法の要点⑦ 助動詞(3) | 46 |
| 8 | いろいろな表現(4) | 48 |
| | 文語文法の要点⑧ 助動詞(4) | 50 |
| 9 | いろいろな表現(5) | 52 |
| | 文語文法の要点⑨ 敬語法 | 54 |
| 10 | 敬語表現に慣れる | 56 |
| | 文語文法の要点⑩ 係り結び(1) | 58 |
| 11 | 助詞による表現(1) | 60 |
| | 文語文法の要点⑪ 係り結び(2) | 62 |
| 12 | 助詞による表現(2) | 64 |
| | 文語文法の要点⑫ 韻文(和歌) 読解の基礎 | 66 |

| | | |
|---|----------|----|
| 1 | 随筆・日記(1) | 68 |
| 2 | 随筆・日記(2) | 70 |
| 3 | 随筆・日記(3) | 72 |
| 4 | 物語 | 74 |
| 5 | 韻文 | 76 |
| 6 | 説話 | 78 |

【例題3】 次の古語を現代かなづかに改めて記せ。

- (1) うへ(上) () (2) にはひ(匂) ()
 (3) あふぎ(扇) () (4) まひ(舞) ()
 (5) あうぎ(奥義) ()
 (6) えうきよく(謡曲) ()

へポイント3

☆動詞の活用語尾のかなづかい

【1】 「イ」と発音するもの

- (a) 「い」と書くもの ↓ ヤ行の「射る・鑄る・老ゆ・悔ゆ・
報ゆ」の五語の活用語尾。
 (b) 「ゐ」と書くもの ↓ ワ行の「居る・率る・率ゐる・用ゐる」
などの活用語尾。

(注) 右以外の「イ」と発音する語尾は全て「ひ」と書く。

【2】 「エ」と発音するもの

- (a) 「え」と書くもの ↓ ア行の「得・心得」の二語と、「ヤ行下二
段活用動詞」の語尾全て。
 (b) 「ゑ」と書くもの ↓ ワ行の「植う・飢う・握う」の三語の活
用語尾。

(注) 右以外の「エ」と発音する語尾は全て「へ」と書く。

【3】 「ジ・ズ」と発音するもの

- (a) 「じ・ず」と書くもの ↓ 「交ず」などの「ザ行下二段活用動
詞」の語尾と、「論ず」などの「サ行変格
活用動詞」の語尾。

(注) 右以外の「ジ・ズ」と発音する語尾は全て「ぢ・づ」と書く。

【例題4】 次の語の漢字の部分に歴史的かなづかいで読みがなを記せ。

- (1) 賜る (2) 俄に (3) 遠し (4) 遂に
 (5) 通る (6) 庭 (7) 貝 (8) 授く
 (9) 水 (10) 塩 (11) 左右 (12) 乙女

【例題5】 次の文の——線部①～⑤を歴史的かなづかいに改めて記せ。

- (1) 飢え死ぬるもの^①のたぐい^②、数をも知らず。 (一) 方丈記 ()
 (2) 前栽など、心とどめて植えたり^③。 (一) 源氏物語 ()
 (3) かきつばたと^④いう五文字を句の上に据えて^⑤、旅の心をよめ。 (一) 伊勢物語 ()

練習問題

○ 次の文の——線部①～⑥の読みを現代かなづかに改めて記せ。

今は昔、いつのころほひの^①ことにかありけむ。きよみづ(清水)に^②
まゐり(参り)たりけるをんなの、をさなき子を^③抱きてみだう^④(御
堂)のまへの谷をのぞき立ちけるが、いかにしけるやありけむ、児を取
り落として谷に落とし入れてけり。 (一) 今昔物語集 卷一九・四一話

- ① 「きよみづ」 () ② 「まゐり」 ()
 ③ 「をんな」 () ④ 「をさなき」 ()
 ⑤ 「みだう」 () ⑥ 「まへ」 ()

高校ゼミ
古文I
解答編



1 歴史的かなづかい (P. 4~5)

例題1 筆記練習

例題2 (あ)・(か)・(さ)・た・な・は・ま・や・ら・わ

例題3 (1) うえ (2) におい (3) おうぎ (4) まい

(5) おうぎ (6) ようぎよく

例題4 (1) たまは(る) (2) にはか(に) (3) とほ(し) (4) つひ

(に) (5) とほ(る) (6) には (7) かひ (8) さづ(く)

(9) みづ (10) しほ (11) さいう (12) をとめ

例題5 ① 飢ゑ ② たぐひ ③ 植ゑ ④ いふ ⑤ 据ゑ

練習問題 ① きよみず ② まいり ③ おんな ④ おさなき

⑤ みどろ ⑥ まえ

〈解説〉 例題1 「ゐ」と「ゑ」の筆記練習を十分積んでおこう。「ゐ」はひらが

なの「ぬ」に似ているが、もともとは漢字の「居」の草書である。また、「ゑ」は、もともとは漢字の「恵」の草書である。

例題2 「五十音図」の「ア段」を順に書く問題も、よく口慣らしをして覚えておこう。

例題3 「歴史的かなづかい」の基本的用法(ポイント2)を覚えたら、あとは「習うより慣れろ」だ。どんどん実際に触れて読み慣れてしまおう。

例題4・練習問題 原則として、高校生は「歴史的かなづかい」が読めればよい。つまり「書けなくともよい」のだが、ここに挙げた基本的な単語くらいは書けるようになりたいものだ。(10)の「を」とめは「可愛い女の子」のことだが、その「女」は「歴史的かなづかい」では「をんな」と書く。それなのに「大人」は「おとな」だ。混乱しやすいところだが、もともと「を」は「wo」と発音し、「お」は「o」と発音した。「歴史的かなづかい」は、みなそのような古語の発音にならってできあがったものである。

2 古語と現代語 (1) (P. 6~7)

例題1 (1) 願い・愛情・心配・恨み (2) (キリギリスなどの) 秋に鳴く

虫の総称 (3) コオロギ (4) キリギリス (5) しみじみとして趣

深い (6) おもしろい・趣がある・上品だ (7) (小さくて) かわいら

しい (8) 愛らしい・かわいい

例題2 (1) が (2) が・を (3) が・の

例題3 (1) 桜の花の色はすっかり色あせてしまったな、そのように私の容

色も衰えてしまったな。私がむなしく、自身の世に処してゆくことで、もの思いをしているうちに。 (2) 田子の浦に船で出てながめて見ると、富士の山の高い頂きに、まっ白に雪が降り積もっている。 (3) 大空を

はるかながめやると、(月が美しく上がっているが、その月は春日にある三笠の山にかつて出ていた月であろうか。 (4) 人里はなれた深い山

に、もみじ葉を踏みわけて鳴く鹿の声を聞く時、秋は(ひとしお)わびしく感じられる。 (5) 秋の田の、刈り取った稲穂を見守る粗末な仮小屋の

草ぶきの屋根の編み目が荒いので、私の衣の袖は、しきりに露に濡れ続ける(ことである)。 (6) 私の草庵は、都の東南の方で、このように(静かに)住んでいる。(それなのに)世間の人は、私が世の中を嫌って住んでいる

宇治山だと言っているらしい。

例題4 問一 おぼつかなし 問二 ① 気がかりなもの ② まる見え

えで(きまりがわるい) ③ とまさないで ④ それでも ⑤ 大切な品物 ⑥ (ある)人のもとに使いにやったのに

〈解説〉 例題1 (1)~(7)までは現代語にも同じ単語があり(同音異義語、たいへんまぎらわしい)「きりぎりす」を「キリギリス」と訳してはならないし、

「あはれ」を「哀れ」の意だけで記憶しておくのは危険だ。特に「思ひ」などは、動詞の「思ふ」とともに深い意味を持っているので、訳語が多岐にわたる。

こういう単語は辞典を活用してその意味をしっかりと覚えよう。

例題2 この問題は比較的よくできただろう。しかし、文脈がもっと複雑になると、「て」「に」「を」「は」と呼ばれる基本的な助詞さえも補えないことがある。注意しよう。